前期日程

令和七年度入学試験問題

国　語（現代の国語・言語文化・論理国語・文学国語・古典探究）

注意事項

一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
二、解答はすべて別紙解答用紙に記入しなさい。
三、解答用紙は八枚です。
四、各解答用紙には受験番号を記入する欄がそれぞれ二箇所あります。すべて記入しなさい。
五、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

一、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

この個所は著作権の関係で表示できません。

この個所は著作権の関係で表示できません。

この個所は著作権の関係で表示できません。

この個所は著作権の関係で表示できません。

この個所は著作権の関係で表示できません。

この個所は著作権の関係で表示できません。

この個所は著作権の関係で表示できません。

この個所は著作権の関係で表示できません。

この個所は著作権の関係で
表示できません。

（朝倉友海『ことばと世界が変わるとき』による。出題の都合上、改変している。）

注1　唾棄――唾を吐き棄てるほど、忌み嫌うこと。

注2　餓鬼の苦しみ――仏教における世界のひとつ、餓鬼道に生まれた者の苦しみ。常に、飢えと渇きに苦しむ。

問一　傍線部①～⑤の漢字は読みをひらがなで記し、カタカナは漢字に直せ。ただし、⑤に関しては、漢字一字で書くこと。

問二　波線部ア～エの「現実」のうち、その語が表している内容が、他の三つと比べて最も異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

問三　本文中の空欄［　　］に入る最も適当な言葉を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　逆説的な
イ　不思議な
ウ　理想的な
エ　現実に反する

問四　傍線部(1)「この世はほとんど「生き地獄」だと言いたくなるのは、このように意味がすべて剥ぎ取られたときである」とあるが、「意味がすべて剥ぎ取られ」るとはどういうことか。わかりやすく説明せよ。

問五　傍線部(2)「他なるものとしての未来」とあるが、筆者はこれをどのようなものと考えているか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　過去・現在・未来という直線的な時間の中にあり、推測は可能だが、あやふやな部分も持っているもの。生きるとはどういうことかという問いが真剣に問われる時に発見され、それに伴って未来へと向かう生命の姿も見出せるもの。

イ　自分にとっては何の意味もないとしか思えないものでも、世界に存在している絶対的な意味を、私たちのもとにもたらしてくれるもの。現実はいまだ完結していないという根底的な気付きを私たちに与え、世界の見方を変えさせるもの。

ウ　生きるとはどういうことかが真剣に問われ、深められるとき、私たちが相対する現実から照らし出され、見出されるもの。予想が難しいだけではなく、私たちの把握を全く超えた、私たちにはまだ知ることができないもの。

エ　私たちが存在しえないかのような状態にまで問いを深めたとき、新しい意味を到来させるもの。現実は無意味ではなく、その意味はこれから来る、または来ていなくてもこれから意味をもつと私たちに感じさせるもの。

問六　傍線部(3)「もし究極の世界以外のすべては無意味なものという位置づけになってしまうのならば、救いがない」とあるが、これはどういうことか。最も適当な説明を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　経験とは新たな真理形態の出現として自己と世界がともに変容していくことであるが、その変容が、たんに苦しいだけの「生き地獄」を回避するために行われるものになってしまうのならば、救いがないということ。

イ　いま新たに開示された真実は、私の変化とともにはじめてもたらされただけであり、以前から自分以外の他人には見えていた真実であって、自分の見方が間違っていただけということになるのならば、救いがないということ。

ウ　経験を通して新たな意味が分かれば、いまだ開示されていない意味をさらなる経験を積むことで分かるようになると考えるようになるが、どんなに経験を積んでも究極の真相にはたどり着けないのならば、救いがないということ。

エ　意味は自己の変容とともにやってくるが、究極の真相が開示されるまでの経験が、理想が破れた時に足元に広がる死体の山と同じように、無意味なものとして捨て去るべきものになってしまうのならば、救いがないということ。

問七　傍線部(4)「意味の変化が重層性を作り上げるところにこそ、真の世界の姿がある」とあるが、これはどういうことか。本文全体を踏まえて説明せよ。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「ちょっと早いけど、下まで降りて待っとろうか」

時計を見て、母が言う。十時五十分。男との待ち合わせまで、あと十分あった。

まだいいんやない。章(あきら)が言うのと、母がマグを倒したのは同時だった。勢いあまって床まで落ちて、ごつんと音が鳴る。中身は飲み干されていて床は濡れなかったが、母の顔はすっとゆがむ。額に湯葉のような皺(しわ)が寄る。大きな音が嫌いなひとだ。階下にも迷惑だと言って、遅刻に焦る章の足音にもよく注意をする。

敏感、というほどではない。母はどちらかと言えば図太いほうだ。玄関先に蛇がいたって悲鳴ひとつあげなければ、乳がんの手術だって「まあ大丈夫やわ」と言い捨てたようなひとである。静かに、起伏なく暮らすことがいっとう大切だと思っている。

その母が、きょうは妙に落ち着かないでいる。

五月の、日曜。章がもうすぐ出かけることになっている。日取りはひと月ほど前から決まっていた。取り決めたのは母である。だのに、その母が当日になって、朝食のトーストを焦がして、マグを倒して、皺を刻んでいる。マグを洗い終えると、もうどこにも身の置き場がないといったふうで、椅子を持ちあげ、机の下へと仕舞ってしまう。せこせこと食卓のまわりを歩いて、陽の差す窓際で立ち止まる。

章はそんな母のようすを見て、意地悪くも緊張がゆるんでいくのを感じていた。自分よりも過剰に反応しているひとを傍から見ると、そのぶんだけ冷静になれる、というあの現象。母が不憫(ふびん)なような気にもなるが、まあ、きょうぐらいは、とも思っている。

「もうちょっと、あとでもいいんやない」章は、先週短くしたばかりの襟足をぞり、と撫(な)でながら、突っ立ったままの母に言う。「外、暑そうやし」

築二十八年の三階建てアパート。章と母は、その三〇二にずいぶん前から収まって、晴れた日にはカーテンを開けるのを習慣

にしていた。あたりには高い建物がないから、こちらを見られる心配もないし開放感がある(と母は言う)。

昼前とあって、日は高く昇っていた。この部屋からは、二階建ての電子機器工場――母が経理兼総務として勤めている――と、赤い屋根の小さな自動車整備場、そして山の麓からずらずらとつづいている田が見えるくらいだ。五月に入って田には水が張られ、苗が植えられた。幼い緑が風にゆれて手をふるのが登下校中にはよく見える。北陸のどうということもない町の、どうということもない景色。母はそれを腰に手を当てたまま、身じろぎもせずに眺める。フローリングの床には、その影がいびつなかたちとなって投げられていた。

「でも、もうおるかもしれんし」

言う母のゆれる影を見れば、なんだか憐れな気にもなって章は、じゃあ、と腰をあげた。立つと、百六十八ある母とほとんど変わらない。中学に入って背が伸びた。クラスの男子のなかでも大きいほうである。もうすぐ母を越す。呆気ないような、嬉しいような、と言ったのは章の身体測定結果を見たときの母だった。

父は、章が三歳の頃に亡くなっていた。病気で、と聞いている。生前は漁師だったらしく、漁に出てしばらく帰ってこない、ということもよくあったようだ(母は明言こそしなかったが、飲み歩いて帰ってこないことも多かったらしい)。

母は、父についてほとんど語らない。どんなひとやった、と訊いてみたこともある。が、そのときも、お酒好きなひと、と答えただけでそれ以上は語ろうとしなかった。２ＤＫの、狭い籠のような部屋を見渡しても父の①コンセキはほとんどない。形見のようなものもなく、アルバムに写真が数枚収められているだけである。

父がいたら、と想像してみたことはある。キャッチボールの相手、銭湯の連れ、自分より大きな力こぶ――でもどれも嘘くさくさがぬぐえない。結局、自然に浮かぶのは母である。ふたりで囲む食卓やロビーで待ち合わせる銭湯。そんなものが、いまや肌まで馴染んでいる。

アパートの階段をたん、たん、と降りていく母につづけば、頭頂部のわずかに薄くなった部分が目に入った。もうすぐ五十をむかえる母はもともと痩せぎすで、髪も細い。「年々、身体から油が抜けていくようやわ」と買い物の際にビニール袋をうまくあ

けられずに言うものだから、代わりにあけるのが章の役目になっている。

「もうおるわ」

階段を降りきった母のほうへ目をやれば、見慣れぬ黒のセダンが停まっていた。運転席が開く。男の頭、つづいて大きな体躯がぬっと出てくる。七年ぶりだった。

百八十を超える長身に、広い肩幅。しゃんと伸びた背筋。浅黒い肌も、昔と変わらない。ただ、以前纏(まと)っていたはずの荒さのようなものは、ごっそりと削ぎ落とされていた。それが三十という年齢によるものなのか、きょうの黒いパンツにカーディガンという服装のせいなのかは、章には判断がつかなかった。黒くなった髪は、短く切りそろえられている。黒縁眼鏡の奥には垂れた一重の目。対照的に眉はつりあがり、唇は薄い。母に向かって笑みを見せるが、親しみを覚えるようなものでもない。

「早いね」

母が言えば、男は車のドアを閉めて「さっき着いたところ」と答えた。流れるように章へも視線が向けられる。男の一重の目に捉えられているのがわかる。章はそれでも、男の車を眺めていた。その近くに停まる、ここの住民の車にも自然と目がいく。埃(ほこり)にまみれたバンと、その隣は年代物の色褪(あ)せた軽。母は十年落ちのコンパクトカーに乗る。ときおりエンジンから不穏な音がするものだから、冬には別の意味でひやりとする。

「じゃあ、よろしく」章の隣に立つ母が言う。男はこくりとうなずいた。遅くならんうちに帰すから。男の言葉に、今度は母がうなずいて見せる。

章も母と目が合うが、なにを言われるでもない。男は「なら、またあとで」と母に大きな掌(てのひら)を見せた。章はその言葉にねじを巻かれたようになって、重い脚を動かす。車の助手席側へとまわり、車内に身体を滑らせる。シートへ身をもたせかけると、さらっとした革の感触があって、ぞくりときた。うっすらと鳥肌がたつ。どうも尻の置き心地が悪い。

「シートベルトしろよ」

A 隣から男の声が聞こえてきて、はっとした。そばで聞けば、雨が染みた土のような重い声である。背筋が自然と伸びる。左肩

へと手をのばすと、シートベルトのするするとした感触が手に触れた。引っぱりだすと同時に、車はゆっくりと走り出す。(1)駐車場に残していく母の顔は、輪郭がぼやけてよく見えなかった。

章はいまだに――車に乗り、助手席に座っておきながらも――この男が腹違いの兄であるということに実感を持てないでいる。

知らされたのは、ひと月ほども前。中学の、二度目の始業式があった日のこと。バスケ部の練習を終えて帰宅し、風呂に入り、食卓について、さあ晩飯という段になって、母が切り出したのだった。

「七歳か八歳くらいの頃に、家に来とった男のひとのこと、覚えとる?」

そっと差し出すように問われて、ふわりと思い出す記憶があった。

章が、まだ黒いランドセルを大きく感じていた小学生の頃のこと。帰宅すると母が――ふだんは凪(な)いだ海のように、感情の波を見せない母が、食卓に座って鼻をすすっていた。向かいに座るのは、柄ものの派手なシャツを着、髪を後ろに撫でつけた若い男である。章はその意外な取り合わせにぎょっとした。初めは見間違いかとも思ったのだが、男を見送り玄関から戻ってきた母の小鼻はほんのりと赤く、湿った唇で「父さんの昔の知り合いで、葬式にも来てくれとったひとなんやけど」というようなことを言うものだから、それにも驚いて、よく覚えていた。

「柄もんのシャツ着とった若いひと?」

箸をとりながら、食卓の向かいに座る母に訊くと「そう。よう覚えとるね。あのときはたしか、父さんの知り合いとかゆうたと思うけど」と、七年越しに言う。「あのひとじつは父さんと、前の奥さんとのあいだにできた二番目の子で――」

章は食卓に並べられたチキン南蛮を頬張りながら――晩御飯が好物である理由を噛みしめながら、母の話を聞いていた。

「名前、豪(ごう)くん言うんやけど。こないだ連絡あってな」

それから母は、まるで転職した元同僚を話題にしているかのような何気なさで、男について語っていった。

現在は運送屋の営業として働いているのだが、トラックの免許も持っていて、たまには運転もするらしいこと。その仕事の関係で、遠くに引っ越すことになったらしいこと。それで近くにいるいまのうちに、章に会いたいと思っているらしいこと……

よく動く母の唇はチキン南蛮の油分に覆われて、てらてらと光っていた。それが、「豪くん、昔はけっこうやんちゃしとってな」と言ったあたりで、すこし滑りが悪くなった。「高校も行かんと……よう補導されて、だんだん道はずれてしまってな。なかなか職も見つからんくって新潟まで行って原発で働いたり、転々として……。いまはもうその会社で真面目に働いとるんやけど」

(2)

まるで同僚のミスを庇(かば)うかのような口調の母に、

「会ったほうがいいってこと」と訊けば、母は首をふって、「章が決めたらいい」と答えたのだった。

いまになって章は、ひと月ほど前の判断を後悔し始めている。

腹が、重かった。兄に対する気まずさや緊張、戸惑い、ちょっとした不安。そんなような感情も、勿論(もちろん)ある。だが、それよりも(3)母が昨晩になって唐突に語り出した過去が、腹に溜(た)まって重かった。訥々(とつとつ)と語られた——できれば知りたくなかった——兄と母の過去は、ごつごつとした石のようになって、昨晩から章の腹に居座った。

いま、兄の隣にいる章の腹のなかで、それがごろりと転がる。胃のあたりをうねるように動く。運転席に座る兄は、緊張するようすも、章を気にする素振りもなく、ただただ前を向いて車を走らせる。

出発してからもう、十五分ほども経っただろうか。ときおり兄から話しかけられることもあった。「バスケやっとるんやって」と問われれば「はい、小学校から」と答えはするが、それ以上話をフクらます(②)余裕はない。

本当はこの機会に、父のことを二、三訊いてみようとも思っていた。母が語らぬ父のことを、兄ならば答えてくれるのではないかと思ったのだ。それできょうのことにも合意をしたというのに、どうしたことだろう。いまとなっては、兄の顔を見るのさ

えままならないでいる。
章は、腹から意識を逸らそうと窓の外を眺めた。田がつらなるだけの道が終わって、車は住宅街へ入っている。片側一車線の道路。歩道には、父親に手を引かれた幼い子どもが、あ、転けそうに――と思ったとき、どん、どん、という腹に響くような太鼓の音が耳に届いた。驚いて、あたりを見回す。もう一度、太鼓の音。そのあとでかすかに、ふぞろいな高い笛の音も聞こえてくる。
「子ども神輿かもなあ」
兄の言葉に章は、身体をひねって音源をとらえようとする。が、音ばかりで姿はどこにも見えない。さっきの親子もどこかで角を曲がってしまったのか、もう見えなくなっていた。
「親父が昔、祭りでよう棒振りしとったん思い出すわ」
兄が、ぽつりと言う。ボウフリ、という耳慣れない言葉に、兄のほうを見る。と、相手もこちらをちらりと見て、結びつくように目が合った。眼鏡の奥には、ひとを射るような鋭い目。
「お前、初めて俺の目え見たな」
言われて、頬が紅潮した。兄の言葉に、思いがけず恥の感情がぷっくりと心に浮かぶ。ニキビのような大きさで急激に隆起するそれは、どうもむず痒くて、章は「ボウフリって」と早口に訊いた。「どんなことするんですか」
「身の丈よりも長い、細い捧持ってな、ふたり組なって演武するんや。棒と棒をタイミングよく、かん、かんと合わして」言いながら兄は、ひと指し指でハンドルをリズムよく、とん、とんと叩く。「これがまあけっこう速くって、近くで見ればなかなかの迫力よ」
へえ、となるたけ声を抑えて呟く章に、兄は口の端で笑ってみせる。
「親父はそれが、なかなかうまかったらしくての。俺にも覚えさせようとして、まだ小学生の俺に棒きれ持たして練習や、言うて振らせたりして」言いながら兄は、運転席側の窓を下げた。外の太鼓の音が、よりクリアになって耳と腹に届く。「親父の振

る棒が脚に当たって、痣なったりもしてな。でも親父は、そんなんもできんのやったら大人になれんぞ、姉ちゃんのことも守れんぞ、とかなんとか言うて、おかげでできるようにはなったけど……」

章は見たこともない姉のことをぼんやりと思い浮かべる。兄の四つ上だという姉。兄と違って身体は強くない、と母から聞いていた。そのとき「あ」と兄が声を出す。「見えるぞ」

言われて、運転席のほうへ目をやれば、一瞬だけ、青の法被を着た子どもたちがちらりと見えた。神輿の姿は見えない。太鼓と笛の音だけが、また交互に流れていく。

「おばちゃんから、親父のこと訊いたりせんのか」

兄が、窓を閉めながら言う。訊いてもあんまり話してくれなくて。章が答えると兄はそうか、と呟いて、「ほんなら、うなぎ食いにいこ思っとったけど、辞めにするか。昔親父につれてってもらったとこ、つれてったるわ」。そう言って、交差点で車をUターンさせた。

車が停まったのは、海沿いにあるドライブインの広い駐車場だった。学校の校舎のような幅広の窓が並ぶ一階部分のうえに、台形の屋根がのって、そこへ「ドライブイン　お食事」という文字がペイントされている。以前は鮮やかな朱色だったのだろうその文字たちは、いまはすっかり色褪せて、外壁もところどころにひびが入っていた。ドライブ中にふと目にしただけでは入りにくいような外観に思えたのだが、昼どきの店の駐車場には、章たちのほかに車が二台と大型のバイクが二台停まっていた。

兄は先に車から出て、駐車した車の背後にある海を眺めている。章もつられて振り向くと、そこには、なににもサエギられず③に見渡せる日本海があった。海面は穏やかで、沖に無造作に積みあげられたテトラポッドにも、波が寄らないでいる。奥に見える水平線はどこまでもつづいていて、空との境を見つめていると、なんだか足元がおぼつかなくなる。ふっと、飛びこんでしまったらどうなるのだろう、と想像する。北陸の海は濃藍に染まっていて、一度入ればどこまででも沈んでいけそうだった。腹が重いようないまは、特に。

店へ入っていく兄につづいて暖簾をくぐれば、うっすらと油の匂いがした。なかは教室くらいの広さがあって、そこへ四人掛けテーブルが六つと座敷が三つならぶ。兄は迷いなく空いた座敷のほうへあがった。店員の女性が水とおしぼりを置くと同時に「海鮮丼、ふたつね」と注文も済ませてしまう。

思わず、向かいに座る兄を見た。店内の壁にはほかに、あら汁定食だの、カツ定食だのが、短冊状になった紙に書かれて行儀よく並び、指名されるのを待っていた。

「親父と外で一緒に飯食ったことなんて、ほとんどないんやけど」章の視線に気づいた兄が、水で口を湿らせて話し始める。「ここだけは三回ぐらい連れてこられての。で、毎回勝手に海鮮丼三つ頼まれるんや。俺と、姉貴と、自分のぶんと」

店内には音量が絞られたテレビが置かれていた。北陸の天気予報が映る。兄は画面へと目をやる。

「別の食べてみたい、言うてみたこともあったんやけどな、これが一番うまいんやって譲らんくて。最初なんか、俺らの丼にもワサビ醤油垂らして、ほら、食え、言うもんやから、からくってしょうがなくてな」

兄は言い終えても画面から目を離さない。それでいて、なにも見てはいないような目になっている。章はその兄の横顔を見て、はっとした。

父に似ている、と思ったのだ。家のアルバムにあった、なにかをぼんやりと見る父の横顔。その顔によく似ていた。がっしりとした骨格に、一重の目。倦んだように下がった口角。

おそらく母が撮ったのだろう写真だった。その写真の父と、兄の横顔が重なる。思えば、兄の広い肩幅も、一重の目も父譲りだ。そっくりというほどではないが、親子であることはわかる。

ふと、思う。章の目も一重である。章の目も、父に似ていて、そして、兄にも似ているのだろうか。肩幅は母に似て狭く、身体の線も細いほうだが目だけは似ているような気がする。誰かに問いたい気にもなる。でも、誰に問えばいいのだろう。兄に訊くのは、気が引ける。それに、ひと呼吸おいて考えれば、ばかばかしいことにも思えてくる。三人とも、血のつながりはあるのだから当然のことなのだ。なんだか自分のしっぽを追っていた犬のような気にもなって、章も画面へと目をやった。店内はぼそ

ぼそとした話し声と、テレビの音が低く流れているだけで、昼下がりの教室のようにぼんやりと静かだった。

ほどなくして先ほどの女性が海鮮丼の載った盆を運んできた。丼にはまぐろの赤身やいくら、鯛といった海鮮が隙間なくしき詰められている。どの海鮮も、内側から光が満ちたようにきらめいていた。丼の横には湯気のあがるみそ汁とお新香、それにワサビののった小皿。兄はワサビに醤油を垂らしてかきまぜ、丼のうえにかけた。その躊躇のなさに思わず、「もう平気なんですか」と訊いてしまう。

兄は怪訝そうな顔でこちらを見た。ワサビ、と指させば、「ああ、不思議なもんでな。いまはこれがいちばん美味い」と、照れたように笑う。

醤油を「ん」と手渡される。章はそれを前に一瞬、迷う。結局、ワサビの小皿に垂らしてみる。まぜあわせて丼にかけ、真珠のように光るいくらと米を、箸で慎重に持ちあげる。

口に含む。すぐにいくらの粒がぱちっと潰れ、濃厚な旨味が舌のうえに広がった。噛みしめる間もなく、鼻の奥がツンとする。次第に涙がにじんでくる。美味しいが、からい。章もからいのは苦手だった。涙を引っ込めながら、ゆっくりと食べ進める。

その目前で、兄は比にならないくらいの速さで丼を空けていった。飲むように食べる。黒い椀の底が早くも顔を出す。みそ汁の湯気にも特段かまわず、ずるずると飲む。

章は頭の片隅で、母が見れば、と考えていた。兄はお新香の皿を、箸でつつっと寄せたりもする。

「もっとゆっくり噛んだら」、「手、使ったら」。章の脳内にいる、ミニチュアの母が言う。

これまで生きてきたなかで、自然に聞きつづけてきた母の声が、章のなかに根づいている。うるさく思うこともあるが、疑うことはほとんどなかった。それが兄には聞こえない。これだって当たり前のことだ。そうは思うのだが、どうも心がざわついて仕方がない。

章は、兄に向って口を開く。

「母のこと、恨んでないんですか」

箸を持った兄と目が合う。一重の、鋭い目。咀嚼(そしゃく)していた口が動きを止めた。

「昨日の夜に、母から聞きました。昔、父に会わせてくれって頼まれたのに母が断ったってこと。豪、さんが困っていたのに、母はなにもせずに追い返して、父に会わせなかったって――」

兄は静かに、ああ、と呟いた。箸を置いて、水を飲む。ごくりと喉が鳴る。

母によるとそれは、兄がいまの章とそれほど年の変わらない頃の話だったという。

その頃兄は、姉と母親――兄を産んだ母親で、父の前妻――と、三人でアパートに住んでいて、といっても、母親は飲んだくれていて頼りにならず、家賃のほとんどは姉と兄のアルバイトでまかなって暮らしていたそうだ(離婚した前妻に父が養育費を送っていたかどうかはわからない、と母は言った。そもそもあっちの家と連絡取り合っとったかどうかもわからんのよ、父さんは漁や言うてふらっと行って三月(みつき)も家空けたりするもんやから、とも)。

だから突然兄が、後妻である章の母と父が住む家を訪れたときには、驚いたという。兄の顔は知っていたが、口をきいたのはそのときが初めてで「玄関先でいきなり話しはじめるもんやから、面喰(く)らってな」。兄は、驚くばかりの母に向かって、ばばあ(母曰(いわ)く、兄は自分の産みの母親をそう呼んだ)が金もって蒸発した、家賃も払えないし姉の喘息(ぜんそく)の薬代もなくて困っている、父を呼んでくれ、と言ったのだそうだ――それも、なかなか乱暴に。

母は昨晩、そのときのことを、それこそ石を飲んだかのように、④眉間に皺を寄せて語った。

「結局、父さんの居所なんかわからん、言うて玄関むりやり閉めたんやわ。そんときはもう家空けて、ふた月ほども経っとったし……」母はそう言って、両手を組み合わせた。そうすれば湧き出る後悔を抑え込めるとでも言うかのように。「でも、本気になって探したら父さんの居所くらい見つけられるって、わかっとった。それに、父さんの居場所なんかわからんでも、なんとかしてあげられたんよ。ただ、あたしが関わりたくなかってん。あっちの家のことに……」

言う母の声は、ふだんのように凪いではいなかった。時化(しけ)た海に垂れ込める暗雲が、章の心にも入り込んだようになって、こ

のときから腹がずんと重くなった。

父は、その一件があってからずいぶん経った頃に帰ってきたという。母伝いで兄の話を聞くと、鼻で笑い、そして、これまで以上に悪評が増え、悪い仲間が増え、補導の数が増えた兄の話を、母に語って聞かせた。最後には「どうしようもないんやから放っとけばええ」と言い捨てて。

「そんなこともあったな」

兄は、あっけらかんと言う。見れば兄の丼はすっかり空になっていて、米の粘り気によってぬめった皿の内側が、蛍光灯の光を反射していた。

「まあとりあえず、食えよ」

兄に促されて章は丼に戻る。三分の一ほども残っていた。黙々と食べた。頭のなかの靄(もや)をはらうように、箸と口をひたすら動かして。もう、からさは感じなくなっていた。

「外で、煙草(たばこ)吸うていいか」という兄の言葉で、席を立つ。会計をしてもらって外へ出ると、広い駐車場にはゆるい潮風が吹いていた。ひんやりとした風が頬をすっと撫でていく。

兄は海を眺めながら、煙草を吸い始める。章もその隣で海を眺めていた。駐車場に入ってくる車はない。さざ波が、沈黙をうめていく。

兄は長い指先に挟んだ煙草を器用に持ちかえながら、カーディガンを脱ぎ始めた。下に着ているシャツも腕まくりをする。ちょうど半袖ほどまで捲(まく)る。そうして露(あら)わになった腕には、七分袖あたりまで刺青が入っていた。緑がかった青色が、腕を覆う。初めて見る⑤ショウゲキで、絵柄はよくわからない。

「ここ、見えるか」

そう言って兄は、二の腕あたりを指さす。章はすっと息を止めて、兄に近づく。色づいた皮膚をまじまじと見つめればそこに、拳ほどの範囲で明らかに引きつれている箇所がいくつかあった。章は一歩退いて息を細く吐きだし、うなずく。

「酔っぱらった母親がな――」兄は淡々と言う。「五歳か、六歳だったか……。はじめは、これ隠すために墨入れての」

兄はきれいに伸びる人差し指で、煙草の背を叩く。砂のような灰が落ちて、先端の火がわずかに見えた。その火が皮膚を焼くところを想像してしまう。じりじりと燃える火が肌に触れてじゅっ、と音がたつ。柔らかい皮膚が焼け、嫌な臭いがする。空気に触れるだけで、痛い……。そして、火種をもつ母の顔――

「自分の母親が、お前のおばちゃんやったらなあ、と思ったことはあるよ」

兄に言われて、脳内には昨晩の母が蘇(よみがえ)った。後悔を滲(にじ)ませて、過去を語った母の顔。思わず、

「助けなかったのに、ですか」と訊いてしまう。

「俺が親父に会いに行ったときはおばちゃん、お前のこと妊娠しとったからな。俺みたいなんからお前のこと守ろうと思ったんやろ」

言われて、腹がぐっと重くなる。それで、気づく。昨晩からずっと、母の後悔を腹に溜めているのだと思っていた。(4) でも、違う。怖かったのだ。母が――章の脳内にすら入って注意を促す母が、兄を助けなかったことがあると知って、知る母がゆれて、怖かった。それを直視するのも怖ければ、いまとなってはその母の行動が、自分のためだったかもしれないと知って、じんわりと陽にあたためられたような心地になることも怖いし、母と自分が静かに暮らす裏で、血のつながった兄がどう暮らしてきたかを知るのも怖ければ、それを知ったうえで、ああ、自分じゃなくてよかったと心のどこかで思ってしまうことも、怖い。

「なんで、俺に会おうと思ったんですか」

兄に向って訊く。思いのほか、尖(とが)った声になってしまう。

「昔の章と約束してな」

兄の言葉に思わず、え、と声が出る。

「親父が死ぬ前に、おばちゃん、ごっついのいっぱいおる事務所まで俺のこと捜しに来て、病院来てくれ、言うてな。なにをいまさらとも思ったんやけど、おばちゃんがまあ、しつこくてしつこくて。結局、病院行って親父に会うてな――」兄の声が、

ほんのすこしゆれる。生前、父が長い時間を過ごしたのだろう海から、風が吹いてくる。「まあ、それでいろいろと終わらして、葬式から帰るときやったかな。章に、また来てなあ、言われての」

「全然、覚えてないです」

本当に覚えていなかった。そもそも父の葬式自体、朧(おぼろ)にしか記憶にない。そうやろうな、と兄は笑う。「もうちょっと早く会おうと思っとったんやけど、おばちゃんに止められとって」

また、え、と声が出る。

「章にはまだ早い、言うて」

「なんで……」

呟くと、「そりゃあ大事に育てとるからやろ」。兄はそう言って、うすく笑う。

なんだか腹立たしいような、情けないような気にもなる。母の保護下にある十四の自分、を意識させられる。かるく拳を握る。爪が掌にあたるのがわかる。すこしずつ力を込めていくと、不意に頭を過(よぎ)る考えがあった。

「母が、父のことを話さないのって」そこまで言って、すこし後悔する。兄に訊くようなことでもない、と思う。だが引っ込められずに、

「母が話したくないからじゃなくて、俺が父のことを知らないままでいるほうがいいと思ってるから……なんですかね」と訊いてしまう。

現実を知るまでは、余白のままにしておけるから。どうとでも、考えられるから。

兄はどうやろうなあと呟いた。言葉と共に吐き出された煙が、空に溶けていく。

「まあでもそうかもな。いい親父ってわけじゃあ、ないしの」

兄はそう言って、大きくあくびをする。後ろへ反るように伸びもする。長い腕が天へ向かって伸び、腕の刺青が日を浴びて黒く光る。前足に黒い模様のある野良猫が、気を許しているような無防備さがある。

章は拳を解いてみる。それでも、伸びをする気にはなれなかった。(5)なんだか知らない場所に放たれた家猫のような心もとなさに襲われている。

「でも、ろくでもない親父ながらに」あくびで涙目になった兄が言う。「章には強く生きてってほしいって思っとったらしいぞ。そう思って名前もつけたらしいし」

「そうなんですか」

驚いて顔を上げると、こくりと兄はうなずく。

「章って、たこからきとるんやと。漢字だと、章に魚とも書くから」言いながら兄は、宙に漢字を書くように指先を動かす。「ひとりでも強く生きていけ、いう意味らしい。たこって、父親は交尾で死ぬし、母親は産んだ卵を飲まず食わずで守るもんやから、孵化したときには力尽きて死んでしまうんやと」

ええ、と章が呟くと、「無責任な親父らしいよな」

兄は肩をすくめて見せる。見れば、煙草を吸い終えていた。腕まくりを解いて、カーディガンを羽織りなおしている。章は、咄嗟に口を開いていた。

「あの、また会ってもらえませんか」

言えば、兄がこちらを向く。口を半開きにして、眉をあげていた。

「棒振り、とか、教えてもらいたくて」言葉がつっかえたようになる。吐き出すように言葉をつなぐ。「豪さんが知ってること、教えてほしいんです。父のことも……、豪さんのことも。このままじゃあ守られてばかりだから……まだひとりで旅行に行ったこともないけど、今度は俺が会いに行くんで」

言うと、兄は「いうてもお前、メキシコやぞ。ひとりで来られんのか」と驚いたふうに言う。

え、と声が出る。すぐに嘘やわ、と返ってくる。兄は笑って、一重の目をさらに細める。

「メキシコでも、行きます」

「嘘やって。日本におるから連絡しろよ」

こくりとうなずけば兄はすこし顔を曇らせて、でもひとりで行く言うたらおばちゃん、心配するかもな、とつけ加える。そうかもしれません。答えながら、章は想像してみる。兄のところへ行くと言ったら、母は額に皺をよせるだろうか。自分も行く、と言うだろうか。あるいは、「章にはまだ早い」だろうか。

「案外、喜んだりしてな。俺が就職決まったって言うたら、おばちゃん泣いて喜んどったけど」

兄が言う。ふとあの日の映像が蘇る。それ、七年くらい前のことですかと訊けば、そうやなと返ってくる。

「そのとき、たぶん俺もいました。家帰ったら母が、鼻すすってて……豪さんが食卓に座ってて」ああ、と兄の顔が明るくなる。「ランドセル背負っとったなあ。見んうちにでかなってて、驚いたん覚えとるわ。きょうも、でかなったなと思ってびっくりしたけど」

「父の遺伝ですかね」

「そうかもな。親父はでかかったから」

兄はそう言って、もう一度伸びをする。「行くか」と、海に背を向ける。

ふたりで車に乗り込んだ。兄からはかすかに煙草の匂いがする。頭の奥で母が「自由にすればいいけど、肺に悪いよ」と囁(ささや)いた。

B 章は兄に言われずとも、シートベルトに手を伸ばす。

凪いだ海がどんどん、遠くなっていく。

（仲谷実織「たこの孵化」による。）

問一　傍線部①～⑤の漢字は読みをひらがなで記し、カタカナは漢字に直せ。

問二　傍線部(1)「駐車場に残していく母の顔は、輪郭がぼやけてよく見えなかった」とあるが、このときの「章」の母に対する心情として最も適当な説明を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　母と目が合ったにも関わらず何も言われなかったので、自分は取り返しのつかないことをしてしまったのではないかと申し訳なく思っている。

イ　男の声があまりにも重い声で恐ろしかったので、思わず母に助けを求めたいような気持ちになっている。

ウ　自分は男の車に居心地の悪さを感じたが、母は自分が男に連れられていくことをどのように感じているのか、気になっている。

エ　朝から妙に落ち着かない母を見てきたが、落ち着いた様子の自分を見せれば安心させられると思っている。

オ　男の笑顔が親しみを覚えるものではなかったので、自分を預けることにした母を恨むような気持ちになっている。

問三　傍線部(2)「まるで同僚のミスを庇うかのような口調」とあるが、なぜそうした口調になるのか。わかりやすく説明せよ。

問四　傍線部(3)「母が昨晩になって唐突に語り出した過去」とはどのようなものか。四〇字以内で簡潔に説明せよ。

問五　傍線部(4)「でも、違う」とあるが、何がどう違うのか。八〇字程度で説明せよ。

問六　傍線部(5)「なんだか知らない場所に放たれた家猫のような心もとなさ」とはどのような心情か。比喩が表しているものを明確にしながら、具体的に説明せよ。

問七　波線部A・Bについて、AとBでは「章」の心情がどのように変化しているか、説明せよ。

三、次の文章は安嘉門院四条(阿仏尼)による日記『うたたね』の一節である。作者の女性はある貴族に恋をするが、順調には行かず思い悩む。本文はその恋に思い悩んでいた当時を回想したものである。これを読んで、後の問いに答えよ。

さすがに絶えぬ(注1)夢の心地は、①ありしに変はるけぢめも見えぬものから、とにかくに障り(注2)がちなる葦分けにて、神無月にもなりぬ。

降り(注3)み降らずみ定めなき頃の空のけしきは、いとど②袖のいとまなき心地して、起き臥しながめわぶれど、絶えて程経るおぼつかなさの、慣らはぬ日数の隔つるも、③今はかくにこそと思ひなりぬる④世の心細さぞ、何に譬へても飽かず悲しかりける。

いとせめて、⑤あくがるる心催すにや、にはかに太秦に詣でてむと思ひ立ちぬるも、かつはいとあやしく、仏の御心の中恥づかしけれど、二葉(注4)より参り慣れにしかば、すぐれて頼もしき心地して、心づからの悩ましさも愁へ⑦聞えむとにやあらむ、しばしは御前に。

供なる人々、「時雨しぬべし。はや帰り給へ」⑧など言へば、心にもあらず急ぎ出づるに、法金剛院の紅葉、この頃ぞ盛りと見えて、いと面白ければ、過ぎがてに下りぬ。高欄のつまなる岩の上に下りゐて、山の方を見やれば、木々の紅葉色々に見えて、松にかかれる枝、心の色も他には異なる心地して、いと見所多かるに、憂き故里はいとど忘られぬるにや、⑨とみにも立たれず。折しも風さへ吹きて、物騒がしくなりければ、見さす(注5)やうにて発つ程、

人知れず契りし仲の言の葉を嵐吹けとは思はざりしを

と思ひ続くるにも、すべて思ひ混ずることなき心の中ならむかし。

A　帰りてもいと苦しければ、うちやすみたる程、⑩御文とて取り入れたるも、胸うちさはぎて引き拡げたれば、ただ今の空のあはれに日頃の怠りをとり添へて、細やかに書きなされたる墨つき、筆の流れも、いと見所あれど、例のなかなかかき乱す心迷ひに、言の葉の続きも見えずなりぬれば、御返りもいかが聞えけむ。名残もいと心細くて、この御文をつくづくと見るにも、⑪日

頃のつらさはみな忘られぬるも、⑫人わろき心の程やと、またうちをかれて、

これやさは問ふにつらさの数々に涙を添ふる水茎(注6)のあと

（中略）

ただ言ひ知らぬ涙のみむせ返りたる。

（本文は『新日本古典文学大系』〈岩波書店〉により、一部改変を加えた。）

注1　絶えぬ夢の心地――（作者の）未だ続いている（恋の）夢の心地

注2　障りがちなる葦分け――葦の茂みをかき分け進むように障害の多いこと

注3　降りみ降らずみ――降ったり降らなかったり

注4　二葉――幼い時

注5　見さす――見るのを途中でやめる

注6　水茎――筆

問一　傍線部①「ありしに変はるけぢめも見えぬ」、④「世の心細さ」、⑤「あくがるる心催すにや」を、現代語訳せよ。なお、①「ありし」、「けぢめ」、④「世」、「心細さ」、⑤「催す」は他の語に変えて訳すこと。

問二　傍線部②「袖のいとまなき心地」とあるが、誰のどのような様子か、説明せよ。

問三　傍線部③「今はかくにこそと思ひなりぬる」とあるが、作者はどのような思いになったのか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　恋人と会えない日々が重なり、恋人との縁を諦めかけている。

イ　恋人から別れを告げられたため、不遇な自分の運命を嘆いている。

ウ　恋人の足が遠ざかる中で、自分の魅力に自信を失いかけている。

エ　恋人との別れを予感して、今後の幸せに不安を抱いている。

問四　傍線部⑥「太秦に詣でてむと」、⑪「つくづくと見るにも」を例にならって文法的に説明せよ。（例は一行だが、二行で書いてもよい）

例　ただ（副詞）涙（名詞）のみ（副助詞）むせ返り（四段動詞・連用形）たる（完了の助動詞・連体形）

問五　傍線部⑦「聞え」、⑧「給へ」の敬語の種類を特定し、さらに誰から誰に対する敬意を表すのかを答えよ。

問六　傍線部⑨「とみにも立たれず」となったのはなぜか。本文に即して説明せよ。

問七　傍線部ａ～ｅの「れ」の中から、自発用法と考えられる助動詞を全て選び、記号で答えよ。

問八　傍線部⑩「御文」について描写する箇所を五〇字以内で本文中から抜き出し、最初と最後の五文字（句読点は含まない）を答えよ。

問九　傍線部⑫「人わろき心の程や」は「みっともない感情だなあ」と訳すことができる。作者はどのような経緯でこのような心情に至ったのか。A「帰りてもいと苦しければ～」以降の本文から、その経緯について読み取り、「～という経緯」に続くように七〇字以内で説明せよ。

問十　『うたたね』と同じ作者による作品を一つ答えよ。

四、次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答は現代かなづかいでもよい。なお設問の都合で訓点を省略した箇所がある。

夫人主莫レ不レ愛レ愛レ己、而ルニ①莫知愛己者之不足愛也。故ニ惑ヒテニ小臣之佞ニ而不レ能ハレ廃スル也。忘レテニ違フモノニ②己之益スルヲ己而不レ能ハレ用フル也。夫レ犬之為ルレ猛也、莫シレ不ルハレ愛セ其ノ主ヲ矣。見レバニ其ノ主ヲ則チ騰踊シテ而不レ能ハニ自ラ禁ズル③、此レ歓愛之甚④也。有レバ非則チ鳴キ吠エテ而不レ遑ニ於夙夜ニ、此レ自ラ効スタ之リ至也。昔宋人ニ有リニ沽ルレ酒ヲ者、酒酸スクシテ而不レ售ルハウレ、何也。以テ其ノ有ルヲニ猛犬ニ之故也。夫レ犬ハ知ルモレ愛スルヲニ其ノ主ヲ、而不レ能ハ下為ニ其ノ主ノニ慮オモンバカリテニ酒酸之患ヒニ而不ルカマ⑤噬也。夫レ小臣之欲スルレ忠ナラントニ其ノ主ニ也、知ルモレ愛スルヲレ之ヲ而不レ能ハレ去ルニ其ノ嫉妬之心ヲ、又安クヒ⑥能敬ヒニ有道ヲ、為ニ己ノ願ハンニ稷・契之佐ヲ哉。此レ養ヒテレ犬ヲ以テ求メレ貧ヲ、愛シテニ小臣ヲ以テ喪うしなフニ良賢ヲ也。⑦悲夫、為をさムルレ国ヲ者之⑧不可不察也。⑨

（『群書治要』による）

注　○小臣――君主の近くに仕える身分の低い家臣。　○佞――媚(こ)びへつらい。
○不遑於夙夜――朝から晩まで止(や)むことがない。　○自効――自分の務めに力を尽くす。
○沽――売る。　○酒酸而不售――酒の発酵が進みすぎて酸っぱくなるほど時間が経(た)っても売れない。
○有道――道徳が身に備わっている人。　○稷・契――后稷(こうしょく)と契(せつ)。古代の伝説的な賢臣。

問一　傍線部①「莫知愛己者之不足愛也」は、「己を愛する者の愛するに足らざるを知る莫きなり」と書き下せる。これに返り点を施せ。

問二　傍線部②「忘違己之益己」の二つの「己」が指し示すものとして、最も適当な二字の漢字を、本文中より抜き出して答えよ。

問三　傍線部③「見其主則騰踊而不能自禁」を、動作の主語を補った上で、平易な現代語に訳せ。

問四　傍線部④「甚」、⑤「何也」、⑥「安」、⑧「悲夫」、⑨「不可不察也」の読みを、送りがなも含めてひらがなで示せ。但し④は音読みしないこと。

問五　本文中の比喩についての説明として、最も適当なものを次のア～カから一つ選び、記号で答えよ。

ア　主人の害になるものを見抜き、徹底的に追い払おうとするあまり、逆に自分が主人の害になることから、犬を「小臣」のたとえにしている。

イ　主人を愛する心はあっても、酒の善し悪しを判断できるほどの知恵はないことから、犬を「小臣」のたとえにしている。

ウ　主人を愛する心はあっても、適切な行動ができずに、かえって主人に不利益を与えることから、犬を「小臣」のたとえにしている。

エ　全ての行動が主人の利益になることはなくても、ひたすらに主人を愛して忠誠を尽くすことから、犬を「良賢」のたとえにしている。

オ　時には主人を不愉快に感じさせることがあっても、長い目で見れば主人の利益になることから、犬を「良賢」のたとえにしている。

カ　主人に気に入られようと近づく者のうち、主人の害になる者を見抜いて追い払うことから、犬を「良賢」のたとえにしている。

問六　傍線部⑦「愛小臣以喪良賢也」について、筆者はどうしてそうなると考えているのか。六〇字程度で説明せよ。